

成人向け

R18

ADULT ONLY

18歳未満閲覧禁止

夜
火

お便秘小説誌

「夜火」

目次

一 峠の狐魔	……6
二 夜火	……29
三 ロードレース遠征	……60

あとがき ……101

奥付 ……106

小説：灰屋ちゃん

表紙、口絵、挿絵：くろがね

峠の狐魔

外では冷たい雨が降っている。時折風が強く吹き付けると小屋の中が揺れる。峠の茅場に置かれた粗末な作業小屋の中で修行僧は囲炉裏の火を眺めながら待っていた。

小屋に来てから一週間が経とうとしている。目当てのものは未だに訪れては来ない。そろそろ食料のために一度麓に戻らなければならないかもしれない。

小屋のあるカザキリ峠は魔所である。

開国前、徳川の世の前半には山越えの街道として盛んに人が行きかったが、次第に人心を惑わす狐魔が出ると噂され、人通りは減っていった。そうして今では山越えには遠回りにはなるが二里南側の峠が主に使われていて、カザキリ峠を使うものはよっぽどの急用を持つものだった。

麓の村でカザキリ峠を通ることを口にする、村人は目の色を変えて必死に止めた。

「お坊様、悪いことは言ひませぬ。カザキリ峠はおやめください。カザキリ峠には恐ろしい狐魔がおります」

「狐魔？」と聞き返す。

「ええ、狐の魔、『狐魔』でございます。狐魔は人を化かします。狐魔にあつたら最後、精

を吐かされ、熱病に侵されて殺されてしまうのです」

「なるほど化け狐ですか」

この修行僧は長い修行の中で、簡単に欲に負けることはないという自負があった。たとえ、どんなに艶めかしい美女の姿に迫られても下半身を反応させたことすらない。

「私は旅の中、娘に化ける化け狐などさんざん見てきました。少しもなびいたことはありません。逆に懲らしめてやってきましたよ」

「それが、狐魔はただの化け狐ではありません。人の欲を読み取る恐ろしい魔の物です」村人がなおも縋り付いてくる。自分が欲をかき、たぶらかされることを心配されている。そのことが修行僧の自尊心を傷つけた。たぶらかそうとしてくる化け狐などあしらえばよい。そんな下等な魔に負けるのは愚か者だけだ。

「大丈夫です。拙僧はどんな狐にも化かされたことはありません。そうだ。村の皆さんも狐魔には悩まされているのでしょうか？ 退治してみせますよ」

村人にそう豪語すると、修行僧はカザキリ峠へと向かっていった。

囲炉裏の火を見つめ、壁に背を持たれさせ、うとうとしていると、コンコンと戸が叩かれた。

「すいません。一晚、泊めてはいただけませんか」

小さな声だった。来たか、と修行僧は思った。

「雨で。寒くて……」

雨風の晩に峠の小屋の戸を叩く。いかにも怪しい状況だ。こういう時はだいたいの化け狐が艶めかしい女性に化けると相場が決まっている。慎重に戸を引く。戸の前に立っていたのは、冷たい雨に打たれ全身ずぶ濡れの少女だった。

少女を小屋に入れると、すぐに囲炉裏の前に座って火に当たった。

よほど寒かったのだろう。顔は真っ白だ。唇が紫に変色し、細い腕を組んでガタガタと震えている。髪から着物までぐっしりと濡れており、見ているこちらも凍えてしまいそうだ。

「濡れたままでは風邪をひいてしまう。僧衣の替えがある。これを着なさい」

修行僧は思わず着替えを渡していた。本当に人なのかは怪しいが、無下にするのも気が引けた。隣の納屋で着替え、少女は囲炉裏の前に戻ると、少女は礼を述べた。

話すことがなくなった。

火が対面の少女を淡く照らしている。ちろちろと火が袖から覗く手首の白の上を影と光が滑る。裾から覗く足首と脛と足の緩やかな線の美しい結合が影を作っている。

狐が化けている姿かもしれないという疑念があってもなお、火を見つめる少女はどこか儚く惹かれるものがあつた。じつと見つめていることを気づかれないように火に焦点を合わせ。時折パチパチと木が爆ぜる。二人の間にはしばらく無言が続く。

するすると僧衣の裾が床を擦る音に修行僧は気付いた。そつと少女のほうを見ると下を向いたまま足を組み替えている。どうしたのだろうかとみていると、少女は不意に立ち上がった。

「あの、ここ、廁って」

ここは作業小屋だから、廁はない、そう告げると少女は焦り始めた。迷っているのかきりに戸のほうに視線をやる。

ふすううう。ぶつ。

少女の尻から音がした。放屁音だ。

「やっ、ごめんなさいっ」

少女は恥ずかしそうに小さい声で謝る。

「ちょっと、外に、行ってきます」

少女はそのまま外へと飛び出していった。

小屋に残されていた男は外へと出ていった少女の開け放した戸を見ていた。

あんなに慌てて出て行つてよっぽど厠に行きたかつたのだろう。少女の残り香が鼻に入る。濃厚な屁の匂いが鼻に残る。濃い匂いが少女の儂い雰囲気と結びつかない。

土間へ降り、戸を閉めて、囲炉裏のそばに戻った。

それにしても。修行僧は考える。

あの娘は何者なのだろうか。この時間にこのような場所を通る娘。ただ人ではあるまい。けれども、人をたぶらかし、精を絞るというのなら、腹を痛めたり外へ用を足しに行く必要があるのだろうか。もしかしたら、少女はほんとうに人間の娘なのかもしれない。なにか峠を通らなければならない事情があつたのだろうか。

しばらくして戸が開いた。少女はげっそりとした顔で、とぼとぼと囲炉裏の前に戻ってきた。囲炉裏の前で立ったまま、座ろうとしない。

体調が悪いのか、とやんわりと腹の調子をいたわると、少女はためらうような表情を浮かべて、それから何かを決心したようにこちらを見てこういった。

「お腹、さすってもらえませんか？」

さする、と思わず聞き返す。

唐突な提案に反応できないでいると、少女は自身の僧衣をほどいた。床板に修行僧が渡した僧衣が落ちる。一糸まとわぬ姿となった少女の肌をちろちろと揺れる火が照らした。

少女の首は折れてしまいそうなほど細かった。

くぼみに水のたまりそうな鎖骨、浮いたあばら骨の凹凸が皮膚の上に影の濃淡をつくる。あばら骨の上に慎ましやかな小さな膨らみがあり、鎖骨の先からは細い腕がつながっている。桃色の爪がついた指の先がぎゅっと握られていた。小さい手だ。つま先からひざ下まで骨の形が分かりそうなほど細い。かろうじて腿の肉に少女らしい丸みを感じられた。少女は心配になるような体つきだった。雨に濡れた細い体は寒さに震えている。

修行僧の目を奪ったのは少女の細い四肢だけではなかった。その腹だ。

あばら骨の下、へその少し上から白い皮膚が前に張り出している。へその穴は横に伸ばされ、下から押され上を向いている。へその少し下をてっぺんにわずかに平坦になった後、皮膚の輪郭は腿の付け根と陰部に向かって降りていくのだ。

腹筋と腰骨の間。少女の細さであればわずかな凹みとなっっているはずの部分も埋められるように膨らんでいる。少女の四肢と突き出た腰骨。それから想像される薄い腹と実際に張り付いている膨らんだ下腹の間には天と地ほどの違いがあった。

皮膚が薄い。皮膚は青い血管が見えるほど白い。その皮膚が内側から押し出され、はち切れそうなほど膨らみ、白く引き伸ばされている。陰の濃淡が腹の膨らみを際立たせてい

夜火

冷気が背中に触れて、布団がめくりあげられたことに気付いた。小さい塊がもぞもぞとタオルケットを掻き分けて背中に触れる。あたたかい。

小さな熱源が凍えるような寝室で背中をあたためる。そっと寝返りを打って、熱源と敷布団の間に指を伸ばす。四十五度の体温とこちのよい湿り気が指先をじんわりと痺れさせた。

その小さな熱源は僕をいつもじんわりとあたためてくれる。

——夜火（よるひ）。

その名を僕がつぶやくと僕の指は夜火の小さな手でぎゅっと掴まれた。

朝が来ると夜火は布団からいなくなっていた。敷布団の夜火が丸まっていた場所は、湯たんぽのようなぬくもりと湿気がシーツの皺の上にとどまっていた。

夜火について僕が知っていることはごくわずかだった。夜に現れること。体が温かいこと。髪は細く柔らかいこと。肌がしっとりとして湿っていること。耳の先が尖っていること。そして、人間ではないこと。

僕は夜火の姿を見たことがない。彼女は目に見えない。夜火谷という土地自体を妖精の

形にしたような存在であった。

この家の寝室からは湯気をあげる噴気孔や泥を噴き出す泉を見ることができた。この家の裏手に広がる夜火谷は、常に噴気が昇っている地熱地帯だった。間欠泉と噴気孔と泥地獄の周りを黒い砂利道でつなぎ、ロープを張った小さな散策路が設けられている。僕は気が向いたときにカメラを持っていつでもこの散策路に降りることができた。

今日は雨だった。合羽を着て散策路に降りる。濁った水が砂利の間から滲んで靴の裏を濡らす。砂利同士がこすれて、ギュリっという音を立てた。

サーモグラフィ―画像を撮ることのできるカメラを用意して、レンズを「泥地獄」に向ける。

「泥地獄」は直径二メートルくらいの泥沼のことだった。灰色の表面からはもくもくと白い湯気と気泡が昇っている。温泉とガスが湧き出ていて、底から湧いてくる気体が灰色の粘っこい泥の膜をまとうて浮き上がる。泥の泡は表面で弾け、灰色の生クリームの上に跡を残した。

地熱散策路を歩くとき、僕は夜火のことを思い出した。ロープの向こうから届くじんわりとした地熱と噴気孔から吹きつける湯気の湿気が彼女を連想させた。

散策路から家を見上げる。人生で貯めたお金のほとんどをつぎ込んで僕はこの家を買った。はじめてこの散策路を訪れた子供の時に僕がこうすることは決まっていたのだと思う。あの日の雨の散策路の湯気も、匂いも、熱も片時も忘れることはなかった。



湯気が空に向かって昇っていく。硫黄の湯気が冷氣と混ざって肺に広がっていくのがたまらなく心地よい。

この家には小さな露天風呂がついていて、硫黄泉を引いている。元別荘の大きな湯船は夜火には深すぎて溺れてしまうので、夜火が風呂に入るときは夜火を手のひらの上に載せて僕も一緒に入った。

夜火の肌は羨ましいくらいすべすべで、あたたかくてやわらかかった。

「夜火、谷見たい」

夜火はお風呂に飽きてくるとよくそう言った。夜火を抱えたまま、囲いから頭を出す。散策路はたいてい誰もいなかった。好んで無名な山奥の散策路を見に来る人は稀だ。夜になっても人を見ることはなかった。入り口の古い電灯と噴気孔の立てる音とぐつぐつという低い音が聞こえてきて、僕はいつも異世界にいるように思えた。

「夜火のどこが好きなの？」

夜火はいつも聞いてきた。散策路を訪れる人は多くない。夜火はいつも土地を愛してくれる人に飢えていた。

夜火を撫でながら、僕はいつも夜火に答えた。

こたつの中で天気予報を眺めながらつまみを広げていると、腿に重いものが乗る感覚があった。夜火が登って来たのだ。彼女の熱が腿の上に伝わってむず痒い。

サーモグラフィーカメラを彼女に向ける。

僕は時々、サーモグラフィーカメラを夜火に向けていた。人間よりも熱を帯びた彼女はサーモグラフィー画像の中ではじめて姿を視認することができた。

長い柔らかな髪。尖った耳。細い手足。僕は温度の輪郭から彼女の妖精のような姿を思い描いた。

彼女はおつまみの燻製卵に興味があるらしく、じろじろと身を乗り出してくすんだ色の卵の殻をつついていて。妖精は物を食べることができるのだろうかと考えながら、食べたいの、と尋ねる。

「うん」と夜火は答えてきた。

夜火の小さい手では殻は剥けないだろう。

殻を剥いてやり、いいよ、と答えると卵が空中に浮きあがった。それから、黄身をぼろぼろこぼしながら卵が虚空へ吸い込まれていく。

結局、用意していた燻製卵はほとんど夜火が食べてしまい、別におつまみを用意しなければなくなった。僕は苦笑しながらビールを飲んだ。食べたら眠くなったのかテーブルの上に夜火が横になっている。夜火の頬を撫でると、夜火はむにむにと頬を動かした。

夜火は次の日も夕食をねだった。夕食を食べているとどこからともなくやってきて、膝の上でじつと手元を見てくる。僕はラーメンや、フライドポテトを夜火にあげた。あまりジャンクフードばかり与えるのもよくないかもしれないと思って、車で一時間半かけて麓のスーパーに降りて、じゃがいもやサツマイモ、卵を買ってきた。

夜火はサツマイモが気に入ったようだった。僕がラーメンをすすろそばで、皿に置いたふかしたサツマイモが端からすごい勢いで消えていく。芋の滓がぼろぼろとテーブルの上にこぼれた。

次の日の夜、僕は夜火と一緒に風呂に入っていた。夜火を持った手を沈めてしまわぬよう、鼻先に持ったまま、夜火を入れてやる。

その日の夜火は少し口数が少なくて、手のひらの上でそわそわと小さな体を揺らしていた。

「夜火、もうお風呂いい。あがる」

夜火はふいにそう言った。風呂に入ってから数分。まだ夜火の体を洗っていない。

「夜火、ちょっと待って。急いで体洗っちゃうから」

「やだ、早く」

夜火は手のひらの上で立ち上がろうとして、バランスを崩した。そのまま手の上に倒れ込む。湯の表面が夜火の形にへこむ。その瞬間だった。

ぽこぽこぽこつ。

小さな泡が浮かび上がって、水面で弾ける。ごまかしような硫化物の匂いがした。

一瞬、沈黙が流れる。

「だから早く上がってたかったのにつ」

夜火はばちやばちやと水面を揺らして抗議をした。おならが出そうだったから早く風呂から上がりたかったらしい。

こぼこぼこぼつ。

手のひらに振動が伝わった。夜火の小さなお腹の中でガスが移動している。

「トイレ行きたいの？」

「ううん」夜火は否定した。

「なんか、お腹変なの。ぱんぱん」

夜火がサツマイモを頬張っていたことを思い出した。ガスが溜まっているのかもしれない。ガス抜きをするためにお腹をさすることを提案すると、夜火は体をゆすって嫌がった。

「やだ、夜火のおならくさいもん。夜火に来る人、夜火のことくさいっていう」

谷の散策路の匂いのことだろうか。夜火は気にしているらしい。

「夜火谷の匂いはいい匂いだよ」

「ほんと？」

「ほんとだよ」

夜火がぺたんと座り込んだのが手の感触で分かった。

「お腹触ってもいい？」

答える代わりに、夜火の小さな手に人差し指が引っ張られた。夜火の肌はやわらかく、あたたかい。子供の肌の柔らかさの奥に風船を押し当てられたような張りがある。気体が溜まっている。

僕は夜火の体の形を想像しながら、少女にうつ伏せになるように言った。ぽっこりしたお腹が濡れた手のひらの上に乗せられた。ヒトより高い夜火の熱が伝わってくる。

僕はもう片方の手の指を夜火の腹に伸ばした。むにむにした左腹に指を沈めると指先が

押し返される。

指先をそのまま夜火の左腹から脚の付け根へとずらす。腸の流れに沿って小さな腹を押していく。指の腹に硬いものが触れた。夜火は便秘なのだろうか。お腹の中にコロコロの便が溜まっているのが想像できた。

一番ガスが溜まっている左のあばら骨の下をぐりぐりと押しやる。

夜火は苦しいのか、手の中で身をよじった。水滴が浮き上がって、丸みを帯びた形をしていた。小さな尻についた水滴が見えているのだ。夜火が小さい尻をこちらに向けているのが分かった。

指の腹で夜火の腸をなぞる。夜火の肌はすべすべで体温が心地よかった。この小さい胴体にガスが溜まっているのがなんだかいつも不思議に思えた。

こぼこぼこぼ。きゅるるっ。

彼女の腹が音を立てた。腸の中をガスが降りてきたのだろうか。

こぼこぼ。

泥地獄の泡が弾けるような音だった。夜火は一瞬動きを止めた。

ふすっ。ふっしゅううううう。

空気の抜けるような音。その直後に特徴的な匂いが立ち昇ってきた。

「はあっ……」

直後夜火は息をついた。とろけた表情が浮かぶような気持ちよさそうなため息だ。お腹は軽くなったか、と尋ねる。

「うん、軽くなった」

「よかった」

こぼこぼこぼつ。

ガスが鳴る。まだ夜火の小さな腹にはガスが溜まっているらしい。

左腹に指を深く差し込んで、ぐいっと左腹の付け根のほうへ引く張る。

夜火の左右の尻の形に張り付いた水滴がくっついて、僕の手ひらに落ちた。

ふしゅうううう。ふすつ。ぶびつ。

ふあああつと再び息をつく。見えなくても夜火の緩んだ表情が想像できた。

僕はマッサージを続ける。指をあばらの下に沿って指を伸ばし、指の腹で夜火の肋骨と腹部の間に溜まったガスを腸の流れに沿うようにかき集めていく。ガスが溜まっているあたりをぐりぐりと揉みほぐし、それから、親指を張った左腹へと押し込んだ。

夜火の小さな手が人差し指の付け根をぎゅっと握った。

ぶっ。ぶびつ。ブっビィィィ。

小さな尻から出たと思えない爆音の放屁。きつい匂いが湯気と一緒に鼻腔に入ってくる。
「はあああ……」

掴まれていた指がそつと離されて、毛先からぽたぽたと滴が落ちた。

夜に乗せた手のひらからしばらく湯気が昇っていて、僕はしばらくそれを見つめていた。

くしゅんつ、と夜火がくしゃみをする音で我に返った。

寒かったかもしれない。夜火をお湯につけてやって、撫でる。

夜火は嬉しそうにすりすり頭をこすりつけてきた。数分で夜火はあったまったのか、湯船から出ていった。

泥火山のような濃い硫化物の匂いだった。僕は湯船に体を深く沈めた。鼻腔には匂いが残っている。僕が好きないだった。妖精のような不思議な存在でも腹にガスが溜まる。

指先には夜火のすべすべした肌と腹の感触が残っている。

愛らしい熱源の小さな胴体。手のひらに載るほどの軽い体の中。お腹が張るほどのガスを抱えた少女。

濡れた水滴が僕に夜火の可愛らしい尻の輪郭を想像させた。柔らかい尻肉を想像させた。放屁をした時の表情を想像させた。

掴まれた人差し指の付け根に触れる。ぎゅつと握る夜火。夜火の尻穴が膨れて口を開く。声を漏らす。小さな胴体のお腹が張っていた。

下半身がひくりと持ち上がった気がして、慌てて立ち上がった。湯が波立った。ふらふらする。

冷気が耳と頭を冷やしていく。とろんとした湯が指先からしたたりおちていくと夜火の幻は崩れて、湯気の裏の水面に落ちていった。

次の日の午後。僕はいつものように泥地獄にレンズを向けていた。日はすでにだいぶ傾いている。散策路を囲む斜面に稜線の影が落ちて暗く淀んでいた。

目の前のサーモグラフィカメラに赤紫のあぶくが映っている。あぶくは膨らんでいく。膜は紫色だ。泥の膜が引き伸ばされていく。薄くなっていく。

ぱちんと泡が弾けた。昨日と同じ匂いがする。

夜火の腹の中もガスであぶくでいっぱいだったのだろうか。

小さい体の腹の中。その中いっぱいガスが溜まっている。やわらかくあたたかい存在がその小さな腹に熱いガスをため込んでいる。

そこまで考えてから首を振った。夜火にそういった感情を向けるのは罪悪感がある。

布団の中のあたたかい塊。夜火にはそうであってほしかった。

ロードレース遠征

一

約束の朝七時半。集合場所の公民館にヒコトの姿はなかった。シートベルトを外し、運転席の座席を少し倒して、ホットココアをすすする。

二月の車内は暖房をガンガンにつけていても寒い。後部座席にカイロを買い込んできて正解だったと、クシザキは思った。

棚春地区ランニングクラブの生徒は、ヒコトだけだ。ヒコトが学校の部活動を辞めてから創設した。

走っているときのヒコトはきれいだ。ヒコトはいつも自信がなさそうにうつむいているのに、走っているときだけは違っていた。

頼りない小さな背中がしゃきと伸びて、細い腕が振られる。細い脚が着地し、後ろに蹴り上げられ、衝撃を逃がす。精巧に、美しく、回転し続ける。薄い透明な肌に血液が回り、うつすらと赤くなる。リズムカルに口から息が吐き出される。

小学生に間違えられることも多い小柄な体に血が巡り、駆動し、発熱し、放熱する。

ヒコトが走っている姿を見ていると彼女はずっと走り続けられるのではないかと思うことさえあった。

実際、ヒコトは距離が長ければ長いほど成績が良かった。筋肉のつきにくい薄くて軽い体は他の子よりずっと長い時間、酸素を回し続けることができた。ヒコトは走るのが大好きで、彼女は部活を辞めてからも走るのを欠かしたことはなかった。

棚春地区ランニングクラブはヒコトが大会に出ることができるようになったヒコトのためのクラブだった。

八時を少し過ぎたころ、ヒコトが走ってきた。リュックを背負って、灰色のウィンドブレーカーに身を包んでいる。

「すいませんっ」

勢いよく助手席のドアが開かれた。

「大丈夫。荷物は後部座席ね」

ベンチコートとリュックサックを後部座席に置いて、少女はシートベルトを締めた。

「すいません。ちよつと体調悪くて」

「大丈夫？ 体調悪いなら走るのやめたほうが……」

ヒコトのほうを見るとヒコトはこちらに顔を向けた。走ってきたせいか少し顔が赤い。

「いや、大丈夫です。具合悪いわけじゃなくて……その……」
「出なかった？」

そう聞くと、彼女はさらに赤くなってそれから小さくうなずいた。

ヒコトが遠征の日に遅れてくるのはいつものことだった。

もともとヒコトは便秘がちらしく、大会が近づくと緊張からか便秘がひどくなる。運動量自体はあるはずなので、心理的なものか体質か。

そして、遠征の前に出してしまおうと一生懸命トイレにこもるのだが、出せない。必死にトイレで踏ん張って、遅刻してしまう。

ヒコトはそういう子だった。

「レースは明日だから。明日までにお腹、軽くなればいいよ。ちゃんとすっきりすればヒコトは速いんだから」

便秘のままだといいいタイムにならない。暗示を混ぜられた言葉に彼女は気づいたのだろうか。

彼女は小さくはい、とつぶやいて、自分の指をぎゅっと握った。

ナビに大会開催地の文字を入れる。高速を使って四時間。休憩を考えれば五時間ほどの道のりだった。

軽自動車で四時間の運転は正直気が滅入るが、仕方ない。ヒコトは大会で陸上部の子と会うのを嫌がるので、遠い場所への遠征が多かった。

今日は移動して開会式とコースの下見だけで、レースは明日。そう考えればまだ気は楽になるだろうか。

それに。クシザキは窓の外をぼんやりと見つめるヒコトに視線を向ける。クシザキはヒコトとの道中は長いほど好きだった。

二

宮城県に入る頃にはヒコトは寝息を立てて眠っていた。ヒコトはクシザキが運転するとすぐに眠ってしまう。石巻女川で高速道路は終点だ。高速を降りて、コンビニの駐車場に駐車する。クシザキは眠っていたヒコトを起こした。

「向こう着いたらすぐ開会式だから、ここでご飯食べちゃおうか」

「……ふあ、い」

ヒコトは眠そうに小さい手で目をこする。ヒコトは普通の学校生活が心配になるほど朝

に弱い。特に今日は朝からトイレで頑張ったから寝不足なのだろう。まだ眠っていたいように見えた。

「ご飯適当に買ってこようか？」

そう声をかけると、うん、と生返事が返ってきた。クシザキは口角を上げないように注意しながら、コンビニへ向かう。数分後、戻ってきたクシザキはヒコトの前で袋を広げた。おにぎりと全粒粉パンのサンドイッチ、それからスムージーとお茶が並ぶ。

「ヒコト、どっちがいい？」

「うーん」

ヒコトはおにぎりとサンドイッチを手にとってじろじろと袋を見た後、こちらをちらりと見て、全粒粉パンのサンドイッチとスムージーを選んだ。ヒコトと今日の旅館の話しながら、クシザキはおにぎりをぱくつく。

「じゃ、出発するね」

までもそもそとサンドイッチを食べているヒコトに声をかけ、ギアをバックに入れた。



川沿いを走っていた国道四十五号はしばらく走ると東へと向きを変え、じきに海が見え

るようになった。三陸の海が眼下に広がる。

「ヒコト、海だよ」

クシザキが声をあげる。

「あ、ほんと」

ヒコトは気の乗らなような声を出した。クシザキはちらりとヒコトに注意を向ける。少女は小さい体を座席に押し付けるように深く座っている。

そろそろか、とクシザキは思った。エアコンの風量を下げる。前を見ながらも、ヒコトのほうに意識を向けた。

赤信号に引っかけた。走行音が和らぎ、車内が少し静かになる。

ふすうううううう。

空気の漏れるような音。視界の隅で少女が体をこわばらせたのが分かった。

匂いが鼻をつく。すぐにわかる濃厚なガスの匂い。ヒコトのガスの匂いだった。

すべてが思い通りだった。

通常なら便秘にいいはずの全粒粉のパンとスムージー。けれども、今の彼女の腹の中ではガスを増やすだけだった。

ヒコトは便秘になるとガスが溜まりやすくなる。便秘で悪化した腸内環境。

便の溜まった腸に腸内細菌の餌になる全粒粉のパンとスムージー。腸内では異常発酵が進みガスがぷくぷくと生み出される。

便ですでに余裕がない彼女の腸管は膨らみ始め、小さな胴体を占有する。ヒコトは腹が張っていくのを感じていたはずだ。椅子に深く体を沈めていたのは、ガスを我慢するためだろう。

かすかなガスの音が聞こえるようにエアコンの風量をさらに下げる。青信号に変わった。アクセルを踏む。

ふすつ。ぷつ。ぷすつ。

小さく音がした。すぐに、濃い匂いが漂ってくる。便がかなり溜まっているのが分かるような匂い。腹の中はガスがパンパンに詰まっているはずだ。もう少女の頭の中はガスをどうごまかすかでいっぱいだろう、とクシザキは思った。

コンビニので食べ物と飲み物を選ばせたとき、事実上ヒコトに選択肢はなかった。ヒコトはお腹に溜まった便を出さなくてははいけないと思っている。そんな中、クシザキの目の前でヒコトは便秘によさそうなものを選ぶことしかできない。ヒコトはそういう子だとク

シザキは知っていた。

「窓開けていいですか？」

ヒコトがそう唐突に聞いてきた。

「窓？」

そう聞き返すとヒコトは口ごもった。

「ちよつと、酔ったかも」

嘘だろう、とクシザキは思った。匂いを嗅がれたくなくて、空気を入れ替えたいのだろう。わずかに待ってから、「いいよ」と答えた。

ヒコトは窓を十センチほど開けた。車内に漂っていたヒコトのガスの匂いが、窓から逃げていく。新鮮な冬の外気が入ってきて鼻腔がツンとする。

もっと早く窓を開ければ匂いを嗅がれなくて済んだのに、窓を開けるといふ決断も遅れ、バレバレな嘘をつく。ヒコトの判断はいつもかわいい。

岩手県に入ったことをナビが告げた。

こぼこぼこぼつ。ぐおおおおおつ。

ナビの音声をかき消すかのようにヒコトの腹が鳴る。ガスを我慢しているのが分かるような腸の逆流音だ。ヒコトが腿の間にぎゅつと手を入れた。

ヒコトはガスを我慢している。腸の中でさっきのサンドイッチとスムージーが分解され、ガスに変わっていく。コロコロの便秘便でいっぱい、腸の中に気泡が溜まっていく。おならをしたくたまらないはずだ。

ヒコトはしばらくうつむいていたが、ふいにパワーウインドウのスイッチに指を伸ばした。

ブウウウウ！　ぶっ。ぶびっ。

少女の尻が高らかに鳴った。

遅れて全開になった窓から吹きつける風と一緒に強烈な匂いが車内に広がった。詰まった便の間を通過してきたからか匂いが濃い。ごまかしようのない便秘のときのおならだった。ヒコトは顔を真っ赤にしてうつむいている。

「あと二キロで道の駅だよ。トイレ大丈夫？」

ヒコトはうつむいて、膝頭を押さえたまま、口をぱくつかせた。

ごぼごぼっ。きゅるるるるっ。ぐううう。

腸が音を立てた。少女の腸内で発生したガスが少女の直腸を膨らませるのをクシザキは想像した。

「トイレ寄ろうか？　ほら、私も行きたいかも」

ヒコトは小さく、はい、と答えた。

道の駅に車を止め、クシザキはゴミを捨ててくるからと言ってゴミ箱に向かう。ヒコトは早足でまっすぐに外のトイレへと向かって行った。腸に溜まっていたガスで便意が誘発されたのかもしれない、クシザキを思った。

ゴミを捨て、クシザキがお土産店のトイレで用を足しても、ヒコトは車に戻ってこない。時計を見る。二十分は経っていた。心配になったクシザキはトイレに再び戻った。ちやうど個室は一箇所しか埋まっていなかったから、ヒコトのいる場所はすぐに分かった。

「……んっ。ふっ」

耳をそばだてると、かすかに息み声がある。腸が刺激されて、便が降りてきたのだろうか。

ぷううっ。ぶっ。

放屁音も聞こえる。おそらく、また車に戻る前に少しでも便を出して置きたい、ガス抜きをしておきたいということなのだろう。

クシザキは時計を見て、それから少し待った。小さいいきみ声と放屁音だけで少女は出てくる気配がない。かわいそうだが、そろそろ開会式の時間だ。

「ヒコト、大丈夫そう？ 開会式出れそう？」

さっきまで、かすかに聞こえ続けていたいきみ声は止んだ。

「……大丈夫です。行きます」

トイレットペーパーを巻き取る音と水を流す音が聞こえる。

助手席でシートベルトを締めるヒコトに「お腹、どう？　まだすっきりしない？」と話しかける。

「……まだ、だめです」

ヒコトは消え入りそうな声で答えた。

三

二十分のガス抜き成果はあったらしい。

開会式の会場まで、ヒコトのお腹は鳴ることも、放屁することもなかった。一度も窓を開けなかった。窓を開ける理由が車酔いでないことを自分からバラしていることに等しいヒコトの選択をほほえましく思いながら、クシザキは車を走らせた。

開会式の会場は古い市営体育館だった。レースの受付登録を終え、ゼッケンを受け取り、体育館に入るともう人が並んでいた。ヒコトはあたりを見回して、一番目立たなさそうな列の最後尾に並んだ。クシザキも少し間を空けてヒコトの後ろに並ぶ。

來賓の紹介があつて、開会宣言、そして長い挨拶が始まった。会場のほとんどの選手が明日のレースのことを考えて上の空なのと同じようにクシザキもまた上の空だった。その視線はヒコトを見つめていた。氣をつけた位置にあつた手がいつの間にか後ろに回っている。

市長が市の名産を紹介している間にヒコトを首をうなだれた。ガスが降りてきているのかもしれない。クシザキがそう思ったとき、ふすうううう、と音が聞こえた。周りの誰にも聞こえないようなかなかな音だった。数秒経って、匂いが昇ってくる。また、腹にガスが溜まってきたのだ。

開会式の式典の間、ヒコトは五回屁をすかして、二回腹を鳴らした。最後のほうは必死に我慢しているのか体を小刻みに揺らしていた。

開会式が終わると、ヒコトは「先に、車戻っててください」と小さい声でクシザキに頼んだ。クシザキが答える前に小走りでトイレへと向かつて行った。クシザキは我慢できずに、後を追った。

ペラペラのスリッパに履き替えて、勢いよく閉められた個室の隣に入る。天井から吊るすタイプのハエ取りが夏から吊るしたままになっている。換気扇も古く防音も考えられていなさそうなトイレだった。

ブウウウウつ！　ぶつ。ブビイイイイ。

お便秘小説誌

「夜火」

[小説] 灰屋ちゃん

[イラスト] くろがね

2025年8月17日 書籍版第一刷発行

発行者：灰屋ちゃん／サークル「灰色ヤモリ小屋」

連絡先：yamori8ihiro@gmail.com

印刷所：株式会社ポプルス

頒布価格／時価

私的利用として許容される範囲を超えて、無断で本書の一部または全部を複製・複写・転載することは禁止いたします。

上記に違反した場合、損害賠償金として金 50,000 円を請求します。

Published by HAIYACHANG 2025 Printed in Japan